

今週のことば「**荒れ野の道**」

《聖書》マタイによる福音書 4:1-11

出エジプト記16章～18章、民数記

10:11-21:21に、**荒れ野の道**の話が伝えられています。**荒れ野の道**でのつぶやきの結果、モーセ以下多くの人たちは入国をはたせず**荒れ野**で死んでいき、ヨシエア以下の民の子孫たちがようやく入国をはたすという悲惨な状態を伝えています。

私たちはこの話を読んで、神の罰の恐ろしさを身にしみて感じさせられます。日頃、神がなんとかしてくれると思っている人も、これでいいのかとあらためて考えさせられます。私たちの現実はそんなになまやさしいものではない事がわかっています。しかし、信仰の事になると、楽観的になってしまいます。

私たちは**荒れ野の道**の話から何を学びとるべきなのでしょう。申命記史家たちのように、**荒れ野の道**を神が共にいて直接指導された恵の期間としてとらえるべきなのでしょう(申命記8:1-20)。申命記史家の時代はすでにイスラエルが入国をはたし、おまけに自分たちの王がで、イスラエルの統一王国を建てる事ができ、その後、北と南の二つの国に分裂してしまっていた時なのです。

人々は自分たちの王の罪を嘆き、昔の日々を思い出して、なつかしく思っていたに違いありません。民は約束の地に入り、豊かな生活をする事によって、むしろ神から離れてしまったと思ひ、たとえ苦しい状態であっても、神の指導のもとに歩んでいた**荒れ野の道**の生活の方がよかったと思うようになったのです。

後で振り返ってみれば苦しい経験も快いものとなるでしょうが、現実には苦しんでいる時はそんなことを考える余裕などありません。私たちの人生はいつも試されているようなもので、乗り越えても乗り越えても、次の障害が待っています。神は決して私たちに代わって戦われるわけではありません。

試みの物語は、旧約の**荒れ野の道**の思想から影響を受けています。四十日間の**荒れ野**での生活は、四十年間のイスラエルの民の**荒れ野**の生活と比較されます。また、この物語は人間が常にさらされている試みが含まれています。これらの試みを楽しめないかぎり、成熟した人間にはなれません。

四旬節第1主日A年(窪野正三郎)

【こじか1981.3.8号掲載文を加筆修正】